

〔浜松市長賞〕

道德について考えた

浜松市立有玉小学校 四年 小島 蒼士

ぼくは道德が苦手だ。自分の考えをひ定されるといやだから。でも道德には答えがあるものばかりではない。たくさん考えて大勢の人の話を聞いて、また考えて。答えのない問題に、自分なりの答えを見つけないかと思つてこの本を選んだ。

「食べていい動物と食べちゃいけない動物のちがいつてなんだろう。」

ぼくは、毒があるものは食べると死んでしまうから食べないのかな、法律で決まっているから、犬はかわいいから食べないのかな、と考えた。家族に聞いたら、食べる人の心情、文化のちがいではないかと言つていた。本には「国や文化、宗教、考え方、し好、などによつて〈食べていい／食べちゃいけない〉、同じ動物が正反対の存在に変わる。」と書いてあった。この動物はかわいいとか、食べたらかわいそうとか、自分が思うことで食べるか食べないかが決まる。つまりある人にとつては食べていい動物でも、ある人にとつたら食べてはいけない動物になる。全ての生き物は食べないと生きていけないけれど、そんなことを考えているのは人間だけかもしれない。

「人がいやがることはしちゃだめ！」つてお母さんは言う。どうしてお母さんは、ぼくのきらいな勉強をおしつけてくるのだろうか、という問い。ぼくに将来ががんばつてほしい、社会で上手くやつてほしい、コミュニケーションが取れる人になつてほしい、高校や大学に行けるように、勉強するように言うんだと思つた。家族に聞いたら、「勉強すること全てが、自

分の命を守ることにつながるんだよ。大人になつてもずっと勉強は続くよ。子供のうちに、勉強の仕方を教わつておくことが大事だよ。」と話していた。本には、「目に見えるもの、見えないもの、手にふれられるもの、ふれられないもの、その一つひとつを知つてゆくのが勉強で、外で遊ぶのも勉強。大人になつたときにいらぬものは自分の判断ですべて捨てて、のこつたものがあなたの勉強したものです。」とあった。そもそも勉強というのは、学校の授業で教わることだけではないかもしれない。勉強つてなんだろう、高校や大学に行つた方がいいのはどうしてだろう。考えているうちに別のぎ間が次々に出てくる。それを考えるのもまた勉強なのかな。

本を読んで答えを知るだけでなく、一人で考えるだけでもなく、家族や周りの人の意見を聞いたり、他の本を読んだり、いろいろな意見にふれていくことはおもしろいことだと思つた。お母さんが、

「女の子同士でけんけんできる国もあったり、昔の人はスカートのようなものをはいたりしたこともあったよ。」

と言つていた。もしかしたら、ぼくが将来、他の国に行つたり、何十年もたつたりしたら、今ぼくが出した答えとちがう答えが出るかもしれない。答えのない問いを常に考えて、一人で分からなければ、周りの人と話をして立ち向かつていきたい。

書名 どう解く？ 答えのない道德の問題

著者名 やまざき ひろし

発行所 ポプラ社

